

1950年代前半における戦後の郷土教育運動の地域的展開

－岡山県・月の輪古墳発掘運動の中の教育実践に着目して－

白井 克尚*

(平成25年6月18日受付, 平成25年12月3日受理)

Regional developments in local education movements after the war, in the early 1950's : Focusing on practical education in the case of the tsukinowa tomb excavation movement in Okayama Prefecture

SHIRAI Katsuhisa *

The purpose of this manuscript is to analyse regional developments in local education movements after the war, in the early 1950's, focusing on practical education in the case of the tsukinowa tomb excavation movement in Okayama Prefecture. This manuscript clarifies four main points about the actual state of practical education.

The first is that survey research activities by local research club bodies were positioned and carried out as part of practical education. The second is that survey research activities aiming to resolve regional issues in Fukumoto village, Okayama Prefecture were handled as part of practical education. The third is that the teachers at Fukumoto junior high school utilized a life skills-oriented method of education in their excavation surveys. The fourth point is that the teachers at Fukumoto junior high school utilized a local history research-based method as part of their social studies classes. Through the above analysis, the case of practical education in the tsukinowa excavation movement, which was a regional development of local education movements after the war in the early 1950's, demonstrates that fieldwork took place that helped to resolve local issues in Fukumoto village, Okayama Prefecture, and that this had the special quality of being life skills-oriented.

Key Words : Teachers at Fukumoto junior high school , Local research club , Resolve regional issues , Life skills-oriented method , Local history research

1. 問題の所在

本稿の目的は、1950年代前半における戦後の郷土教育運動の地域的展開について、岡山県・月の輪古墳発掘運動の中の教育実践に着目して分析を行い、その特質について考察することである。

戦後の郷土教育運動については、これまでに郷土教育連絡全国連絡協議会（以下、郷土全協）の活動を中心に語られてきた^(注1)。郷土全協は、1952年に結成され、1950年代前半において戦後の郷土教育運動をリードしていた民間教育団体である。しかし、郷土全協は、歴史教育者協議会との論争を発端として、「1958年8月に35号をもって機関誌の共同編集は打ち切れ、また1963年12月には、日本民間教育団体連絡会（略称 民教連）からの脱退を経、郷土全協は60年代以降には教育学研究の表舞台にはほとんど現れなくなる。ゆえに、その活動や理論はあまり注目されず、歴史的にも埋もれた形となっている⁽¹⁾」と指摘されている。そのため、これま

で1950年代前半における戦後の郷土教育運動の実態については、十分明らかにされてこなかったと考えられる。

最近の教育史研究では、このような研究の枠組みを転換させようとする動きも見られる。臼井嘉一は、戦後日本の民間教育団体による教育実践を捉える視座として、「これらの教育実践がそれぞれの時期の社会的歴史的課題とどう切り結びどのような教材構成や授業展開を進めつつ、子どもや父母地域住民とどのような学校をつくりあげているかという観点から位置づけ直すことも重要な課題である⁽²⁾」と述べている。この臼井の指摘にしたがえば、1950年代前半において「郷土」をふまえる教育実践に取り組んでいた戦後日本の郷土教育運動の地域的展開の実態を明らかにすることは、戦後日本の教育史研究の上で重要な意義を認めることができるだろう。

以上のような問題意識にしたがい、本稿では、戦後の郷土教育運動の地域的展開について、岡山県・月の輪古

* 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学生 (Doctoral program student of the Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education)

墳発掘運動の中の教育実践に着目し、具体的な事例として取り上げて検討することとしたい。周知のように、月の輪古墳発掘運動は、1950年代前半の国民的歴史学運動の一環として、考古学分野において取り組まれたものである。これまで、月の輪古墳発掘運動の教育的側面については、主に歴史教育論レベルでの検討を中心に進められてきた^(注2)。ところが、この岡山県・月の輪古墳の近隣に位置していた英田郡（現美作市）福本中学校の教師たちが、戦後の郷土教育運動の一環として、教育実践に取り組んでいたことはあまり知られていない。

月の輪古墳発掘運動の中の教育実践について論及している先行研究としては、小国喜弘による研究をあげることができる。小国は、月の輪古墳発掘運動の中の教育活動に着目し、文集『月の輪教室』の中の教師たちの手記や生徒による生活綴方の分析を通して、「民族の歴史」という歴史認識の枠組みを明らかにしている⁽³⁾。しかし、小国の研究では、月の輪古墳発掘運動の中の教育実践の実態について、必ずしも焦点を当てて論じているわけではない。そのため、教師たちによっていかなる教育活動が取り組まれていたのか、また生徒たちはどういった学習活動を展開していたのか、そのような教育実践の具体的な実態は明らかにされていない^(注3)。そうした先行研究の状況をふまえ、本稿では、月の輪古墳発掘運動の中の教育実践に着目し、1950年代前半における戦後の郷土教育運動の地域的展開について、教育実践レベルでの考察を深めていきたい。

2. 本研究の方法

本研究では、月の輪古墳発掘運動の中の教育実践について、福本中学校の教師たちが残した実践記録をもとに、その地域的展開の実態を明らかにしたい。分析の対象としては、当時の教師たちが雑誌論文の形で発表した実践記録を第一次史料として扱うこととする。また、史料の妥当性を考慮し、当時の教え子からの聞き取り調査の記録などの複数の資料を用いることとしたい。なお、実践事例の分析は、次の手順で行う^(注5)。

- (1) 実践記録に基づき、教育目標を抽出するとともに、どんな内容が取り上げられ、どんな方法が展開されているのかを明らかにし、実践の事実を確定する。
- (2) なぜそのような内容が選択されるのか、教授・学習活動がなぜそのように展開されるのかを、実践の背後にある教師の考えに基づいて明らかにする。
- (3) 教育実践における生徒の学習の特質について、そこで取り上げられた学習内容や用いられた学習方法に即して検討する。

以上のような研究方法により、1950年代前半における戦後の郷土教育運動の地域的展開について、岡山県福本中学校の教育実践の取り組みに即して考察を行うことと

する。

3. 岡山県英田郡福本中学校における教育実践への取り組み

(1) 月の輪古墳発掘運動の中の福本中学校

月の輪古墳発掘運動の中の教育活動の概要については、小国の論文(2003)に学ぶところが多い。そこで、本稿では、その中の教育実践の展開に関わる事項に絞って述べておきたい。岡山県・月の輪古墳発掘運動とは、1953年の8月から11月にわたり、勝田郡飯岡村（現・久米郡美咲町）にあった月の輪古墳が、地元の多くの住民たちにより発掘された運動のことである。この運動は、国民的歴史学運動の一環として、考古学分野で取り組まれた活動として位置づけられている⁽⁴⁾。このような一つの地域をたんねんに研究するという活動が生じた背景には、当時の「国民的歴史学運動」といった思想的動向があったと考えられる⁽⁵⁾。

また、1951年7月に告示された『中学校学習指導要領・社会科編日本史C（案）』の第一単元では、「遺物や遺跡を見学・調査し、歴史を科学的に取り扱おうとする習慣・技能」を身につけることによって、「神話や伝説を正しく批判する態度」を養おうとする視点が示されていた⁽⁶⁾。こうした戦後社会科教育の考え方に賛同したのが岡山県英田郡福本中学校の校長の岩本貞一と教頭の重歳政雄であった。岩本は、岡山大学の近藤義郎に月の輪古墳を紹介した人物であり、重歳は、日本歴史学習の単元構成や学習に教科書『日本の成長』^(注5)を利用しながら社会科教育実践に取り組んでいた人物であった。福本中学校では、戦後早くから研究指定を受けて積極的に社会科教育に取り組み、度々自主的な研究会を開くなど、地域の学校の中心的存在として知られていた学校であった⁽⁷⁾。さらに、同校の社会科教師の中村一哉は、月の輪古墳の発掘調査以前の1951年度より、校内に郷土室をつくり、郷土誌や資料を集めて郷土の調査活動を行っていたという⁽⁸⁾。つまり、福本中学校の教師たちは、郷土史研究を活用した社会科歴史教育に関心をもち、郷土史研究にすすんで取り組んでいたのである。

表1は、1950年代前半における福本中学校の教師たちによる教育実践に関連する年譜を示したものである。この表からは、福本中学校の教師たちによる郷土史研究や教育実践が、発掘運動の進展とともに展開されていたことがわかる^(注6)。

(2) 中村一哉における「新しい郷土教育」実践への着手

また、福本中学校の教師たちの中でも、郷土研究クラブの中心的指導者であった中村一哉は、1950年代前半において、社会科歴史教育のありかたを模索していた人物であった。中村は、郷土研究クラブの活動成果を、社

表1 1950年代前半における福本中学校の教師たちによる教育実践の展開・関連年譜

年度	福本中学校の教師たちの取り組み	関連する出来事
1951（昭和26）	1月 重歳政雄「日本の成長を利用して」 『社会科歴史』No.1(1) 4月 郷土研究クラブの活動を始める。	7月1日 『中学校学習指導要領社会科編（試案）』が発表される。
1952（昭和27）	11月 中村一哉手記「みんなで、みんなのために」	3月1日 近藤義郎編『佐良山古墳群の研究』（津山市）が刊行される。 11月14日 福本中学校・岩本貞一、重歳政雄、岡山大学・近藤義郎、飯岡村教育委員会・角南文雄らが訪れ、月の輪古墳の第一回踏査が行われる。
1953（昭和28）	2月 中村一哉手記「準備のための共同研究」 5月 重歳政雄「社会科日本史 研究会記録」 『社会科歴史』No.3(5) 6月 中村一哉「郷土史研究グループ実践の素描」 『社会科歴史』No.3(6) 7月 中村一哉手記「いっしょに学んでいくのには」 9月 学校の新学期が始まり、生徒の自主的参加は、放課後と日曜日に行われる。福本中学校では、教師たちの討議によって、発掘現場への参加計画が社会科の授業の一環として再編される。 10月 中村一哉手記「子供の成長を軸として」 10月 中村一哉手記「見学案内書をつくる」 10月 中村一哉手記「古墳は動いている」 10月 「野井戸」の朗読指導を行う。 11月 中村一哉手記「月の輪のひろがり」 11月 郷土研究クラブが和島誠一指導により、約10日間、福本中学校裏のタタラ遺跡の発掘調査を行う。 12月中村一哉「封建社会の農村の実態」 『社会科歴史』No.3(12) 12月 中村一哉手記「教師としての反省」 12月 中村一哉手記「月の輪の子ら」	1月28日 飯岡村文化財保護同好会が結成される。 5月5日 月の輪古墳の発掘を決定する。 8月15日 発掘調査が開始される。 9月上旬 和島誠一、久永春男が加わる。 9月26日 古墳斜面の調査の一段落とともに墳頂部の調査が開始される。 10月16日 内部主体の発掘に取りかかる。 10月27日 三笠宮崇仁が訪れる。 11月14日 発掘の総括的な報告と発掘運動の経過報告をかねた総会が開かれ、700人近い参加者がある。 12月31日 最終的点検、発掘終了。
1954（昭和29）	1月 中村一哉手記「郷土研究をすすめるために」 2月 中村一哉手記「噴煙となって」 2月 重歳政雄「月の輪古墳と村の歴史をつくる運動」 『地方史研究』No.11 3月 重歳政雄・中村一哉「月の輪への道-新しい郷土観をはぐくむ-」 『歴史評論』No.53 6月 中村一哉「月の輪古墳と福本扇状地の研究」 『郷土教育月報』No.6 8月 中村一哉「夏休みの郷土史研究 実践の報告」 『社会科歴史』No.4(6) 8月 中村一哉が郷土教育第三回研究大会（お茶の水女子大学）において実践報告を行う。 9月 中村一哉「事実から真実を」 『私たちの考古学』No.2 11月 中村一哉「月の輪古墳 発掘の仕事のなかから」 『教師の友』No.4,11	1月中旬 記録映画『月の輪古墳』（北星映画）が完成する。 3月1日 「月の輪古墳と国民的課題」が『歴史評論』（No.53）において特集される。 4月1日 「古ふんをつくった人々」が、小学校社会教科書『あかるい社会4年上』（中教出版）に掲載される。 6月9日 文部省による記録映画『月の輪古墳』の推薦撤回問題が起る。 7月26日 月の輪古墳刊行会編『月の輪教室』（理論社）が刊行される。 9月1日 「月の輪古墳」が『吉備地方史』（No.8）において特集される。
1955（昭和30）	3月 中村一哉「社会科と考古学的方法について」 『私たちの考古学』No.4	
1960（昭和35）		11月1日 近藤義郎編『月の輪古墳』（月の輪古墳刊行会）が刊行される。

会科学習において活用しようとクラブ活動の運営を行っていた。その中村にとって、教育観の転換の契機となったのが、月の輪古墳発掘運動への参加の経験であったという。中村は、その経験について、次のように振り返っている。

郷土史研究グループの活動が社会科学習の中に生きてこなければならないのにちぐはぐになってしまいま

す。私の反省はいつもそこに帰着する。この誤った行き方をはっきりと自覚させ、真に新しい道のあることを示唆してくれたのは、数千人の大衆が、大衆自身のために積極的に参加してつづけた古墳月の輪の発掘という大渦巻であった。すすんで古墳の発掘に参加し、古墳を学び、古墳で学んだ子供達は具体的な事物の中に、何が真実であるかという問題意識を育くみ、活々と瞳を光らせた。⁽⁹⁾

このように中村は、月の輪古墳発掘運動の参加の経験を通して、福本中学校の郷土研究クラブの生徒たちが問題意識をもちながら歴史を学んでいく姿に教育的な意義を認めていく。また、そうした中村の考えを補強したのが、当時の郷土全協の指導者であった桑原正雄による戦後の郷土教育の理論であった。当時の桑原は、「生活の中から真実をつかみ、郷土を変えていく子供を作る⁽¹⁰⁾」といった「新しい郷土教育」の考え方を主張しており、それは社会科歴史教育において郷土史研究を位置づけようとするものであった。中村は、桑原との出会いについて、次のように述べている。

そういう中に初めて、教師だけの集いをもったのは、「郷土教育の会」の桑原氏を迎えた夜のことであった。月の輪で働く教師のみが集まった淋しい会であった。もっと早く、発掘以前からもつべき会であった。(中略)教師自身が、互いの立場を理解し合い、広場をつくって立ち上がろう、そういう話合いで私達は『月の輪教師の会』をつくった。⁽¹¹⁾

このように中村は、桑原と出会ったことを契機として、「月の輪教師の会」をつくり、教育実践にすすんで取り組んだことを印象的に振り返っている。そして、教育実践を進める中で、「私共は、知識の科学性という事と同時に、指導の科学的方法がとられてこそ、新しい郷土教育が前進するものである事を、はっきりと知ったわけである⁽¹²⁾」と述べる。このようにして中村は、1950年代前半における戦後の郷土教育運動を、岡山県田郡福本村において、教育実践を通じて展開していたのである。

さらに中村は個人的にも、1954年8月に東京都・お茶の水女子大学において開かれた第三回郷土教育研究大会（筆者注：郷土全協主催）に報告者として登壇し、月の輪古墳の中の教育実践について発表を行っている。このような事実からも、中村が、1950年代前半における戦後の郷土教育運動を代表する教育実践家であったと位置づけられるだろう。

では、そのような形で取り組まれることとなった月の輪古墳発掘運動の中の教育実践は、岡山県英田郡という地域において、当時の社会的歴史的課題とどのように結びつき、また生徒たちにとってどのような学習活動として組織されていたのであろうか。以下、月の輪古墳発掘運動の中の教育実践の実態を明らかにし、1950年代前半における戦後の郷土教育運動の地域的展開の特質について考察していくこととしたい。

4. 郷土研究クラブを主体とした教育実践

(1) 地域教材の自主編纂活動と結びついたフィールドワーク

中村は、月の輪古墳発掘運動以前より、社会科歴史学習における研究問題解決的な単元学習のあり方を模索していた。そして、郷土研究クラブの運営を通して、地域教材の自主編纂活動に取り組んでいたのである。中村による郷土研究クラブを主体とした最初の代表的な取り組みが、「福本扇状地の研究^(注7)」であった。表2に示したのは、そうした研究実践の展開過程である（T―教師の発問・指示・説明等、P―子どもの発言・疑問・作業等）。

ここからは、実践の特質として、以下の二点を指摘することができる。

一点目は、「古墳とは何か」「何か土器の破片はころがってないか」などといった生徒たちの興味にもとづいて、郷土研究クラブを主体としたフィールドワークが計画的に行われていることである。1951年度に公示された『中学校学習指導要領』では、全ての生徒に対して毎週2～5時間ずつの特別教育活動の時間が課され、時間配当に関する限りでは特別教育活動の「黄金時代⁽¹³⁾」であったという。この特別教育活動の時間を利用して中村は、生徒と共にフィールドワークを行っていたのである。すなわち、郷土研究クラブのフィールドワークの活動は、福本中学校の教師たちによる地域教材の自主編纂活動^(注8)と結びついたと考えられる。

二点目は、フィールドワークや室内での調査を通して、「川のうつりかわり」、「地形の変化」、「集落の変動」などといった福本扇状地の地理的・歴史的特質を生徒たちがすすんでとらえようとしている点である。それは、生徒たちの問題意識にもとづいた主体的な調査活動が組織されたためであったと考えられる。中村は、この「福本扇状地の研究」について次のように振り返って述べている。

『いたずらに多くのものに目を奪われず、物事の本質をみぬき、現実の社会を前進させようとするもとの力をもった子たちを』という私のねがいは福本扇状地の研究でありましたが、それは又述べてきたところの郷土教育的方法であると思っています。⁽¹⁴⁾

このように中村は、「福本扇状地の研究」について、当時、郷土全協が主張する「郷土教育の方法⁽¹⁵⁾」を活用した典型的な教育実践であったと位置づけているのである。そして、その実践の展開過程では、生徒たちによって主体的な郷土の認識がめざされ、フィールドワークを活用していたところに教育方法面での特質があったといえよう。

以上のことより、この「福本扇状地の研究」は、福本

表2 福本中学校・郷土研究クラブによる「福本扇状地の研究」の展開過程

段階	学習活動
第1次	<p>古墳とは何か。外にはないのか。なぜあんな大きいものをつくったのか。古墳の近くから土器のかけらが出るがあれは何か。いつ頃造られたものなのか。興味から出発する疑問。その疑問に答えるための活動。</p> <p>P：いこうじゃないか いってみよう</p> <p>T：それじゃ、地図と年表をもち、ノートと巻尺と小さな土かきのこてをもって</p>
第2次	<p>ある日の午後、希望者の何人かが、学校の近くの一歩大きい古墳（筆者注：丸山古墳）に集まっている。</p> <p>T：一何か土器の破片はころがっていないか。</p> <p>P：一ある、ある 一もっとさがしてみろ。</p> <p>T：集まったものを別けてみる。</p> <p>P：青いうすいかけら須恵器、赤くてもろいかけら土師器、その中でもぶ厚いかけら。陶棺の破片。型の小さいものは一埴輪。</p> <p>T：それでは古墳のしくみをしらべよう。</p> <p>P：横穴の口にたつ。</p> <p>P：高さ、奥行き巾をはかって記入。</p> <p>T：石のつみ方、石の大きさ、石の種類、粘土の使用をくわしく調べてみよう。</p> <p>T：20年程昔、ここをほりかえしていろんな物を掘り出したんだ。直刀が出た。鏡が出た。陶棺が出、埴輪が出土したという話だ。残念ながら、学問的な良心で掘られていないため、みんなちりぢりになってしまったんだ、おいしいことだ。</p> <p>P：一たいして役に立たんだろ。</p> <p>T：いや、盗掘してなかったら、その頃の事がくわしく判るだろう。おいしいことだ。</p> <p>T：今度は外を削ってみよう。盛土はどこからか。</p> <p>P：一歩いてみる。盛土の高さ、長さ直径方角は、…つぎつぎに記入していく。</p> <p>T：さあ、天上石の上に立とう。そうして当りを見わたそう。昔はあの平野の中を流れている。川もずっと向こうの山すそを流れていたんだ。地図でどの位あるか、面積を計ってごらん。古墳はあの山のおもとにある。この丘あふ畑と点々とあつて、この平野だけでも40近くあるんだ。けれどもこんなに大きくはないんだ。どうしてここだけこんなに大きいのだろう。</p> <p>P：えらい人がいたんだ。その人の墓がここなんだ。</p> <p>T：まてまて。年表で見ると古墳時代は何年位つづいているかな。原始時代縄文時代一から弥生時代一それから古墳時代だね。いまから何年位昔なのか一この時代は4百年もつづいているね。4百年。短い年じゃないぞ。ところで奈良県一和歌山地方について、この岡山県吉備地方は多いのだ。岡山県だけで1万はあるという。その中の9割以上は、4百年の終りの方なのだ。後期のものだね。ここでも後期のものがだんぜん多い。しかしこの古墳は中期のものなんだ。このずっと奥には、堅穴の中期でも早い頃のものがある。中期と後期とどんなに違うか。なぜ古い時代のものが少ないのか。これは一つ帰ってから考えてみよう。</p> <p>T：ところでこれだけの古墳をつくるのにどれだけの人夫がかかったらうか。それを計算してみるのもおもしろいぞ。なぜかってそれだけの労働力一奴れい一をつかう豪族がここに住んでいたから。そうしてどのくらいの人がここにすんでいたか。考えつけるじゃないか。</p>
第3次	<p>室内での調査</p> <p>P：生徒の活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・土をつくり、発見した順に地図に記入していく。年表に記入していく。 ・出土品の原型を考え、用途をしらべる。 ・その頃の人々はどうな生活をしていたか調べたり考えたりする。 ・川のうつりかわり、地形の変化、集落の変動等を調べる。 ・次に実地踏査すべき古墳について、かつての発掘のようをたずねる。
第4次	<p>土地の成り立ちの調査</p> <p>P：生徒の活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・簡易測図をつくりながら岩をしらべ、地形を観察する。 ・荒れかけた畑の中に、山麓の野井戸の中に、土地の成立条件を求めつつも、祖先が歩いてきた歴史の足跡をたずねて今の自分達の生活と対比させる。 ・地下水を測り、沖積地をしらべ、水害と水の利用を話し合いつつ、土地の動きと人の生活とを結び付けて調査をすすめていく。

中学校の教師たちによる地域教材の自主編纂活動と、郷土研究クラブの生徒たちの問題意識に基づいた調査研究活動が、「郷土教育的方法」としてのフィールドワークとして結びつき、生徒たちによる主体的な郷土の認識を可能にした研究実践であったととらえることができるだろう。

(2) 福本村における地域的課題の解決をめざした調査研究活動

次に中村は、「具体的な身のまわりの事物を通して問題を見、その中にひそむ真実をたずねあてようとする新しい郷土研究の歩みは古墳の発掘がかなりすすんでから始められた」といい、「封建社会の農村の実態の研究」^(注9) に取

表3 福本中学校・郷土研究クラブによる「封建社会の農村の研究」の展開過程

段階	学習活動	獲得される歴史認識
第1次	<p>＜農村の人口構成についての研究＞</p> <ul style="list-style-type: none"> 古文書『文政7年2月当宗門人別御改帳・美作国英田郡福本村』の調査を行う。 性別年齢別に人口を整理していき、人口構成を知る。グラフに記入していく。 村役場世帯別人員簿を借りてきて同様の作業を並行して行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 昭和27年の表は、ひょうたん型。壮年層男子の僅少な点が、現代の農村労働の大問題として関心をよんだ。 文政7年の表は、棒状型。各年齢層の変化のない数字から、人口増加の見られぬ原因がどこにあるかが、議論的となった。封建社会の農村における人口増加の問題は、生まれないのか育たないのか。
第2次	<p>＜宗門改帳の研究＞</p> <ul style="list-style-type: none"> 明記された事実から、当時の社会制度や社会生活の状態を生徒自身に発見させる。 宗門寺別戸数の計98、他に無高無門1戸、人口合計412人、別に年齢不明の奉公人15人、姓を名乗りうる者は庄屋の田中一戸のみ、家来3戸、3人組6人組などの制度の存在、庄人と年寄2人とその職務、医師4人は何れも親子組、神宮二人も同じく親子、他はすべて持高をもつ百姓という事実を次々に列挙していく。 	<ul style="list-style-type: none"> 全村民が旦那寺に従属せしめられて、切支丹信徒ではないという証を明らかにすることを強要された信教の自由は認められなかった村人の生活はまことに不自由極まるものであった。 宗門改めを口実に、村にくぎづけにされ人々は、五人組制度による連帯責任を負わされ、年貢米絶対量の負担に日夜営々として土に向かって汁を流さなければならなかった。 自分の土地から逃れることも出来ず、職業の世襲下では新しい職を求めて生活の道を切り開くことも許されなかった。農民たちの中にも、自ら身分の上下は生じていた。

り組んでいく。生徒たちは、学校近くの旧庄屋の納屋から発見された「文政7(1824)年2月当宗門人別御改帳」「美作国英田郡福本村」という一冊の古文書を丹念に読み取り、性別年齢階層別に整理して、人口構成を明らかにしていった。なお、古文書とは別に村役場世帯別人員簿を借りてきて、昭和27(1952)年の男女別の人口構成も明らかにして比較検討を行っている。そして、この封建社会の農村の実態の研究実践には、「発掘には余り積極的でなかった生徒たちもすすんで参加した⁽¹⁶⁾」という。

図1は、生徒たちが作成した福本村の人口構成図である。文政7年の表が棒状型で、昭和27年の表がひょうたん型を示していることがわかる。そのような比較を通して、生徒たちは文政7年における各年齢別の変化のない数字を読み取り、過去に福本村において「まびくという人道上の重大な問題⁽¹⁷⁾」が行われていた歴史的事実を明らかにしていったのである。そして、「自由なき封建社会の村人の生活の苦しみ」という福本村に残る地域的課題が、現代の生活者である生徒たちに理解されていくこととなる。

さらに表3に示したものは、「封建社会の農村の実態の研究」の展開過程である。この表3からは、実践の特質として、以下の二点を指摘することができる。

一点目は、「古文書」や「宗門改帳」などの郷土の具体的事物を学習材として、生徒たちが現代につながる労働人口の問題といった地域的課題に眼を向けている点である。中村は、福本村の地域的課題について、「共同作業場で輸出品製作の不安定な作業に従う未亡人やかつて

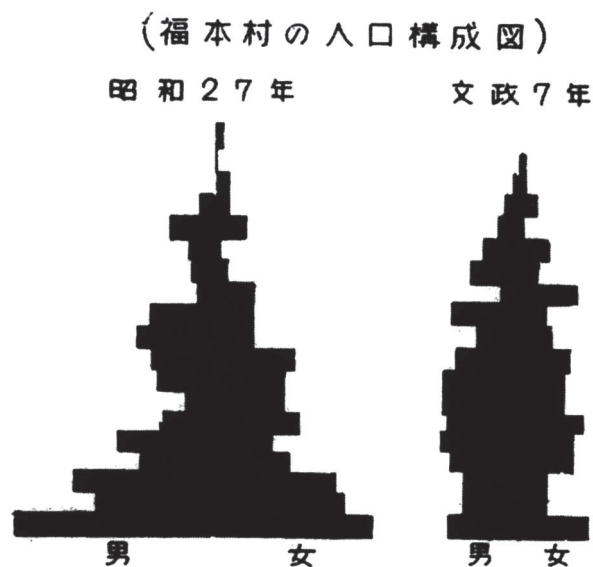


図1 生徒たちの調べた福本村の人口構成図

の失業者たちは、鉱山労務者に比すれば驚く程の低賃金でかなり苦しい仕事にとりくんでいる。次第に荒らされていく扇状地の畑の中に自分自身の不安がひそんでいか、村の問題は直接日本の問題とつながって⁽¹⁸⁾いるととらえていた。当時の福岡村の住民の多くは、近くの柵原鉱山に従事していたが⁽¹⁹⁾、一方で失業者や反失業者、戦争未亡人や困窮者の仕事の確保⁽²⁰⁾などといった地域的な問題が顕在化していた時でもあった。そのために、当時の福本村における労働人口の問題は、地域的課題としてあげられ、そうした課題を解決しようとする意識は、生徒たちに共有されていたと思われる^(注10)。

二点目は、生徒たちが、「村人の生活はまことに不自由極まるものであった」「農民たちの中にも、自ら身分の上下は生じていた」というような「科学的認識^(注11)」を形成している点である。それは、福本村に残る封建的な社会関係の克服をめざす歴史認識の仕方であり、現代に生きる生徒たちの生きる姿勢の変革につながる考え方であった。そのような「科学的認識」は、月の輪古墳発掘運動に参加した人たちの「民衆による民衆のための歴史⁽²¹⁾」を探究したいという願いと結びついていたように思われる。

以上のことより、「封建社会の農村の研究」は、地域的課題の解決をめざした調査研究活動と結びつき、生徒たちに農村の労働人口の問題や、封建的な社会関係の克服に関心を向けさせ、「科学的認識」の形成を可能にした教育実践であったとしてとらえることができるだろう。

5. 社会科歴史教育実践としての取り組み

(1) 発掘調査の中での生活綴方

また、福本中学校の教師たちは、「主体的な生活の姿勢を確立」していくために、発掘調査を通して、生徒たちに詩や作文を書かせることを重視していた。これは、「きびしい現実を正しく見つめ、未来への確かな夢を育てていく⁽²²⁾」ために、発掘調査の中での教育方法としての「生活綴方的教育方法」を取り入れた成果であった。生徒たちは、月の輪古墳の発掘調査の作業の中で、ポケットに手帳を忍ばせ、自分の見つけた小さな歴史を書き留めていったという⁽²³⁾。つまり、『月の輪教室』のような発掘調査に参加した生徒たちによる生活綴方の記録が残された背景には、福本中学校の教師たちによる指導が存在し

ていたといえる。

表4は、発掘調査の中の生活綴方の一部を抜粋したものである。引用したものは、福本中学校の生徒たちによる発掘調査の中の生活綴方の取り組みの様子が具体的に現れているもののみを示した。

「道の歌」の生活綴方は、スライド『月の輪古墳』の冒頭に登場するものであるが、この作者・遠藤太郎に対して、当時の教え子であった角南勝弘氏は、「中村先生が熱心に作文指導していた」ことを振り返って語ってくれた^(注12)。また、「書けてしまった詩」という詩のタイトルや、「詩が書けていた」「詩はこうして生まれるのですね」といった内容からは、福本中学校の教師たちが熱心に作文指導を行っていたことを物語っている。体験したことを克明に綴るという学習記録のあり方は、「生活綴方的教育方法」における「概念くつき⁽²⁴⁾」の手法にもとづくものであったと考えられる。当時、月の輪古墳発掘運動に参加した永瀬清子氏は、このような生活綴方の意義について、「それならば本当はどうなのだろう。その疑問が郷土愛ともつながり、科学的な知識を求める心ともつながったと思う⁽²⁵⁾」と振り返って述べている。

以上のことより、発掘調査の中の生活綴方は、現代の福本村に生きる生徒たちの生活態度の形成の役割を担っていたことも明らかになる。なお、発掘調査の中の生活綴方という教育方法は、1950年代前半において、全国各地で郷土全協の立場から取り組まれていた教育実践において共通する手法でもあった^(注13)。

(2) 社会科日本史授業における郷土史研究の活用

月の輪古墳発掘運動の進展と並行して福本中学校の教

表4 福本中学校の生徒たちによる発掘調査の中の生活綴方

道の歌	
誰かが歩いていく	／ 何人かが ぞろぞろ歩いていく
道	／ たった一本の道ではあるけれど
民衆が歩いてきた道は	／ もっと細かったかな
いや	／ 何十年何百年たつうちに
道は	／ 今のように太ってきたのだろう
人の	／ 人のちからが
こんなに道をひろくしてきたんだろうな	(福本中3年・遠藤太郎)
書けてしまった詩	
先生	／ 詩を作りて古墳へ登った
でも	／ 良い詩が生まれなかった
何故でしょう	／ 作業をしなかったからでしょう
いや	／ 毎日働いている先生のすがた
熱心な人々のすがたに	／ 恐怖して
追	／ 思った通りに綴ったら
詩が書けていた	／ 先生
詩はこうして生まれるのですね	(福本中3年・是末幸恵)

師たちは、「新しい教育のあり方」としての社会科教育の指導に熱心に取り組んでいた。そして、「社会科指導の尊い経験と資料の集積は教師と生徒のたゆまぬ努力によってなされて行った⁽²⁶⁾」と述べる。

そうした運動の展開過程の中で行われていたのが、1953年2月4日に実施された社会科日本史授業「鎌倉時代の新仏教」の実践である。表5には、その展開過程を示した（T—教師の発問・指示・説明等、P—子どもの発言・疑問・作業等）。

本授業実践の特質については、以下の二点を指摘することができる。

一点目は、地蔵様の分布図の作成や、寺を訪問するなどの調査研究活動が、生徒たちによって取り組まれていることである。授業者の重蔵政雄は、「地方史研究こそ本質的な社会科教育の唯一の道です⁽²⁷⁾」と考え、地方史研究を活用した社会科授業実践に取り組んでいた。重蔵は、この授業の指導観として以下の四項目をあげている。

A、指導観

※ 社会の姿というものを正しく見極め、これを正しく発展させる人を教育する、その場合、歴史的な観点に立ってものを見ていかねばならない。

※ といって生徒の能力や心理を無視した教育はありえない、しかも生徒の興味に捉われることなく、より高次の学習が指導されなければならない。

※ 地方に立脚した歴史教育をもっと真剣に考えさせられる。地方史の究明なくして中央日本史の歴史の認識は生徒には無味乾燥なものであろう。郷土に出发し中央史の学習をなし、また郷土にかえる学習こそ最も大切な学習形態ではなかろうか。而もこれは単なる中央理解のためのものでなく、反対により正しい中央史建設のための地方史と思っている。

※ どの地域でもどの学校でも進められるような教材で授業をすることに決めた。⁽²⁸⁾

この項目からもわかるように、重蔵は、生徒によって行われる地方史研究を、生徒の能力や心理の向上に結びつくものとしてとらえ、社会科日本史授業を行っていたのである。そして、生徒による地方史研究が、どの地域でもどの学校でも展開できることを望んで教育実践に取り組んでいたことが明らかになる。

また、前述の中村一哉も、生徒たちによる考古学研究について、次のように考えて、教育実践に臨んでいたことを明らかにしている。

破壊の考古学から建設の考古学へ、若い世代の限らない努力は、考古学そのものをひとり前進させたのみ

でなく、みんなの考えを、とくにまじめな教師や生徒達の考えをしっかりとめたものと思うのです。最近の動きが、単なる興味や気まぐれの労力奉仕で終わるのではなく、そしてそれが日常の教育と切り離された存在としてではなしに、あくまでも計画的な教育の積み重ねの上に立つ教育としての、本当に新しいのちのめをつちかい、のぼすそこちからのある教育実践でありたいと心からそう願う次第です。⁽²⁹⁾

このように中村は、生徒たちによって考古学研究が行われることが、「そこちからのある教育実践」を可能にすると考えるのである。したがって、福本中学校の教師たちは、生徒たちによる郷土史研究を、社会科の学習過程において位置づけようとし、社会科授業実践に取り組んでいたといえる。

二点目は、生徒たちが「質問→応答」というように、根拠づけながら論理的に思考している点である。それは、地蔵様が建てられた理由についてのディスカッションの様子からもわかる。」すなわち、重蔵は、生徒たちの思考力の育成をめざして、社会科日本史の授業実践に取り組んでいたのである。

こうした論理的思考力の問題に関わって中村は、次のように述べている。

事物の直観から批判力、思考力を養う教育に高めていく考古学的方法が、真にその効果をあげようとするならば、多くの人たちの変革されていない意識の変革に役立つものでなければならぬであろうし、又そのためには、変革されていない意識の立場への理解なくしては、考古学的な研究は単なる遊び事の、うしろ向きのままごと遊びと同じ結果になってしまうのではないかとおもう。⁽³⁰⁾

このように中村は、考古学的な研究が、生徒の批判力、思考力を養うものとして考え、社会科の授業実践に取り組んでいたこともわかる。中村は、後に「系統的な歴史教育が、子供達の生活を通して、感情に訴え、ちえを働かせて教えられてこそ、歴史は現代に生きる人たちになくってはならないものになる⁽³¹⁾」として、小学校からの系統的な歴史学習を主張していくこととなる。

以上のことから福本中学校の教師たちは、地方史研究や考古学的研究の成果を活用して、社会科日本史授業実践に取り組んでいたことも明らかになった。なお、社会科授業において生徒による郷土史研究の成果を活用しようとする教師の実践的態度は、1950年代前半における戦後の郷土教育実践に共通する特質であったと考えられる^(注14)。

表5 社会科日本史授業「鎌倉時代の新仏教」の実践の展開過程

段階	授業の経過
導入	<p>T：今日は時間が足りないので、1班から順に発表、後でまとめて私が議長でディスカッションします。各班は能率をあげて発表して下さい。</p> <p>P：生徒の班別発表：</p> <p>(1班) 生徒は日曜日登校し、1万分の1の学区内の地図へ教室の後方からでも分る地藏様の分布図を作成しこれで発表。</p> <p>(a)この地藏様は子どものヨーダレが出なくなるよう信仰されています。(b)これも同じ。(c)これは昭和の初め建てられたもので、この川で自殺した人が極楽へ行けるよう家の人が建てました。(d)この地藏はせきどめ、特に子供のせきを直して下さるそうです。(e)この地藏は子供のかんや又イボを取って下さるそうです。(f)この六体地藏は死んで極楽へ行くため。(g)これは有名で皆さんよく知っていますが火事がないよう又雨乞いのため信仰されています。(h)これは村ざかいの地藏様で子供の病気をなおしてくれるといわれています。(i)これは真木山へ登るため道へ迷わないように一町毎に18ありましたが今は12しかありません。(j)この地藏さんは今は人家のなかにありますが昔の香合、井口村の境にありました。(以下略)</p> <p>(2班) 郷土の偉人法然について 小黒板に要点を記入してこれで発表。</p> <p>法然上人源空は1132年美作国久米郡に生れ、15歳で比叡山に登り、源光というお坊さん更に叡空について勉強し、源光の源、叡空の空の字をもらい、源空といっていました。(親鸞については発表したことを紙面の関係上略)</p> <p>(3班) 栄西及び道元、禅宗について3人で発表。</p> <p>これも小黒板で説明、特にこの地域の茶の栽培の歴史について。</p> <p>(4班) 日蓮宗の生徒3人が発表。</p> <p>(a)吉が原法経寺と訪ねて(b)日蓮の生い立ちと日蓮宗(c)全国・岡山県・この附近の日蓮宗の寺について</p> <p>(5班) 郷土に鎌倉時代の新仏教の寺がどのように分布しているか。</p> <p>(a)2郡の分布図を作成して発表。</p> <p>英田郡(勝田郡) 曹洞宗 0(1) 日蓮宗 5(3) 浄土宗 (1) 真宗 8(3)</p> <p>(b)旧仏教の真言宗は、25(17) 天台宗 (7) 合計49寺もあり、新しい仏教の寺がわりあいに少ないので、研究して見ました。はっきり分りませんが、これは前々から仏教を信仰していたらたやすく改められない、ということと、天台、真言も新仏教に刺激され、だんだんと改められたからだと思いました。それにしても禅宗ですが、曹洞宗が唯一つということ。郷土の栄西の広めた臨済宗がなぜないか不思議でした。これも私なりの研究ですが、禅宗は鎌倉武士にあつく信仰され郷土の私達の方には多分こられなかったのでしょうか。(中略) こうしたことが今日禅宗の寺が貧弱で少ないわけであろうと思いました。</p> <p>(6班) 鎌倉時代と平安時代の仏教の特色</p> <p>(a)平安時代の仏教は 1 祈祷仏教 2 貴族仏教 3 深山で研究し修道した。</p> <p>4 一般の人々と関係が少ない。5 伝道や社会事業にあまり熱心でない。6 仏教芸術とは関係が深い</p> <p>7 儀式的な仏教であった。</p> <p>(b)鎌倉時代の仏教 1 大変民衆的。2 布教に熱心であった。3 関東や奥羽、九州へと地方へひろまった。浄土宗→鎌倉、奥羽へ 真宗→関東、北陸、九州 禅宗→鎌倉武士</p> <p>(いずれも小黒板で発表)</p>
展開	<p>—教師が司会したディスカッション(残り15分間)—</p> <p>(生徒は、はいはいと指名してくれと挙手、実に活発である。質問→応答、誰も一生懸命、討議される問題は、1班の調べた村々に建てられている地藏様に集中される。)</p> <p>P：(c)の地藏様は手に錠をもっているが、どういう意味ですか。</p> <p>(1班もこれには答えられない。)</p> <p>T：確かに錠ですが…よく見てごらん蓮の花だと思えますがね…</p> <p>今一度見学にして解決はあとまわし。</p> <p>P：地藏様は今いろいろと信仰されていますが、子供と関係深い理由は。</p> <p>(1班もいろいろ応答)</p> <p>T：私もよい答えは出来ないかもしれない。</p> <p>これは6班の鎌倉時代の仏教の特色とも関係あり、(6班の発表した小黒板布教主義の文字を示し)皆さんよく分ったね。(中略)物心のつかない子供の死。親の切ない心持。どうか地藏様に助けられるよう、子供の冥福を祈る親心として、子供と地藏さまが関係深いのだと先生は思います。</p>
まとめ	<p>T：いそいで小黒板に書かれた仏教の宗派、開祖、年代を提示、反復させる。</p> <p>T：結び、今日はいつものようによくやったが先生ももっと話したいことがある。次は真木山、三重塔を見学してそこで勉強しようと予定していたが今一時間、今日の問題をやってもよい。週当番でみんなの意見をまとめなさい。</p> <p>(次の時間又本時の続きとし、新仏教の概要、宗教改革鎌倉時代の仏教の特色について、ディスカッションを実施した。)</p>

6 研究の成果と課題

本稿では、1950年代前半における戦後の郷土教育運動の地域的展開について、月の輪古墳発掘運動の中の教育実践に着目して考察してきた。本稿によって明らかになったことは、以下の四点である。

一点目は、郷土研究クラブ主体による調査研究活動が、教育実践という位置づけのもとに行われていたことである。福本中学校の教師たちは、研究問題解決的な単元学習を重視する立場から、社会科歴史教育のあり方を模索していた。そして、フィールドワークを通して、地域教材の自主編成活動と、郷土研究クラブを主体とした調査研究活動とを結びつけながら教育実践に取り組んでいたのである。

二点目は、岡山県福本村における地域的課題の解決をめざす調査研究活動が、教育実践として取り組まれていたことである。生徒たちは、郷土の具体的事物に関する調査研究活動を行い、労働人口の歴史的な把握や、封建的社会関係の克服といった地域的課題に眼を向けていった。そのような地域的課題の克服をめざした調査研究活動を通じて、生徒たちは、科学的認識を形成していったのである。

三点目は、福本中学校の教師たちが発掘調査の中で生活綴方的教育方法を活用していたことがある。発掘調査の中での生活綴方の取り組みは、生徒たちによる生活態度の育成を可能としていた。さらに、発掘調査の中での生活綴方という教育方法は、1950年代前半の全国各地における郷土全協の教育実践において共通する教育方法でもあった。

四点目は、福本中学校の教師たちが社会科授業において、郷土史研究法を活用していたことがある。福本中学校の教師たちは、生徒の批判力、思考力を養うことをねらいとして、生徒たちによる地方史研究や考古学研究を取り入れて社会科授業実践に取り組んでいた。そのことはまた、1950年代前半における郷土全協の教育実践に共通する手法でもあった。

以上述べてきたように、1950年代前半における戦後の郷土教育運動の地域的展開について、岡山県・月の輪古墳発掘運動の中の教育実践の事例からは、岡山県福本村の地域的課題と結びついたフィールドワークが行われていたことや、発掘調査の中での生活綴方といった特質をあげることができる。なお、これまでの研究では、月の輪古墳発掘運動の中の子どもたちの感想の分析を通して、小国喜弘(2007)が、「独自の歴史意識の萌芽⁽³²⁾」を読み取っているが、本稿における事例分析を通じて、郷土研究クラブを主体とした調査研究活動や、発掘調査の中での生活綴方的教育方法の活用など、教育実践としての具体的根拠を明らかにすることができたと考える。

また、1950年代前半における郷土全協の運動の特質

として、板橋孝幸(2013)は、「初期の郷土全協における運動は、フィールドワークを行いながら『教育内容と教育方法の統一』に取り組もうとしていた」とまとめているが⁽³³⁾、本稿での事例分析を通じて、戦後の郷土教育運動の地域的展開について、教育実践レベルでの実態を明らかにすることができたと考える。

最後に本稿では、1950年代前半における郷土教育実践に焦点を当てたため、戦前の郷土教育実践との比較までは検討できなかった。また、その後の福本中学校の教育活動の展開と、月の輪古墳発掘運動の中の教育実践がどのように結びついていったのかについては明らかにすることができなかった。そうした点についての検討は、今後の課題としたい。

—注—

- 1 1950年代前半における郷土全協の活動を論じた先行研究として、以下のものをあげることができる。谷口雅子、森谷宏幸、藤田尚充「郷土教育全国協議会社会科教育研究史における〈フィールド・ワーク〉について—戦後社会科教育史の研究(ⅡのⅠ)—」『福岡教育大学研究紀要』第26号第2分冊社会科編、1976。臼井嘉一「戦後歴史教育における内容編成の理論」『戦後教育と社会科』岩崎書店、1982。木全清博「地域認識の発達論の系譜」『社会認識の発達と歴史教育』岩崎書店、1985。松岡尚敏「桑原正雄の郷土教育論—『郷土教育論争』をめぐる—」『教育方法学研究』第13号、1987。廣田真紀子「郷土教育全国連絡協議会の歴史—生成期1950年代の活動の特徴とその要因—」『教育科学研究』第18号、2000。
- 2 月の輪古墳発掘運動の教育的意義について論じた先行研究として、以下のものをあげることができる。吉田晶「月の輪古墳と現代歴史学」『考古学研究』第120号、1984。西川宏「学校教育と考古学」『岩波講座日本考古学』第7巻、岩波書店、1986。小国喜弘「国民的歴史学運動における日本史像の再構築—岡山県・月の輪古墳を手がかりに—」『東京都立大学人文学報』第337号、2003（再収「国民史の起源と連続—月の輪古墳発掘運動—」『戦後教育のなかの〈国民〉—乱反射するナショナリズム』吉川弘文館、2007）。中村常定「月の輪運動と歴史教育」角南勝弘、澤田秀実編『月の輪古墳発掘に学ぶ—増補 改訂版—』美前構シリーズ普及会、2008。
- 3 月の輪古墳発掘運動の中の教育活動について小国喜弘は、「月の輪古墳の発掘運動の特徴は、その発掘を一種の教育的営為として組織しようとする点にあった」としている(小国、2007:p.103)。本稿では、中でも福本中学校の教師たちによる教育実践を取り扱い、論述を行った。

- 4 授業展開や学習展開を中心とした教育実践の分析の視点については、以下の研究を参考にした。峯岸良治『「地域に根ざす社会科」実践の歴史的展開と授業開発—授業内容と授業展開を視点として—』関西学院大学出版会、2010
- 5 教科書『日本の成長』については、梅野正信『社会科歴史教科書成立史—占領期を中心に—』日本図書センター、2004. に詳しい。
- 6 月の輪古墳発掘の発端は、「福本中学校教諭の中村一哉が中学生と共に古墳（丸山古墳：筆者注）を発掘したことからはじまっている」（小国、2007:p.100）とする視点が、小国によって提示されている。しかし、表1に示したように、発掘運動の発端には、福本中学校の教師たちによる郷土史研究や教育実践の取り組みも、間接的にはあるが影響を与えていたように思われる。
- 7 この福本扇状地の研究実践について論及している先行研究として、小国（2007）、中村常定（2008）の研究をあげることができる。しかし、教育実践としての位置づけのもとで論じているわけではない。
- 8 フィールドワークに参加することによって、具体的にものを見るという地域教材の自主編成の態度は、1950年代前半における歴史教師に共通する姿勢であったと考えられる（佐藤伸雄『戦後歴史教育論』青木書店、p.75、1976）
- 9 この「封建社会の農村の実態の研究」について論及している先行研究として、小国（2007）、中村常定（2008）の研究をあげることができる。しかし、教育実践として取り上げて分析しているわけではない。
- 10 1950年代前半頃の福本村の社会状況について、角南勝弘氏は、「美作1市5郡、五千人の農民が参加した『納得のいく所得税』をめざす税金民主化運動」が展開され、労働者の生活を守るための活動が盛んであったことを述べている（角南勝弘「月の輪古墳発掘50周年」『歴史地理教育』No.656、p.83、2003.7）。
- 11 1950年代前半における「科学的認識」とは、「研究＝創造活動とその職能に根ざした社会的実践を統一的に包括」しようとする認識の仕方であり、当時の福本村の地域的課題の解決をめざしたものであったと考えられる（歴史科学協議会編『戦後歴史学用語辞典』東京堂出版 p.325、2012）。
- 12 元・福本中学校生徒の角南勝弘氏からの聞き取り調査の記録より（2012年6月1日、岡山県美咲町・月の輪郷土館資料館において実施した）。なお、「中村一哉」とは、中村常定氏のペンネームであったことも教えてくださった。本稿では、原文資料の表記のまま、全て「中村一哉」として統一した。
- 13 発掘調査の中の生活綴方といった教育方法は、1950

年代の中学校における郷土教育実践にも共通する特質であった（白井克尚「1950年代の中学校における郷土教育実践の特質に関する一考察—愛知県知多郡横須賀中学校の杉崎章の取り組みに即して—」『学校教育研究』第28号、2013. 参照）。

- 14 社会科授業において郷土史研究の成果を活用しようとする教師の姿勢は、1950年代前半における相川日出雄による小学校の郷土教育実践にも共通するものであった（白井克尚「相川日出雄による郷土史中心の小学校社会科授業づくり—『新しい地歴教育』実践の創造過程における農村青年教師としての経験と意味—」『社会科研究』第79号、2013. 参照）。

一文 献—

- (1) 廣田真紀子、前掲「郷土教育全国連絡協議会の歴史—生成期1950年代の活動の特徴とその要因—」、p.33
- (2) 白井嘉一「戦後日本の教育実践の全体像を捉える視点」白井嘉一監修『戦後日本の教育実践—戦後教育史像の再構築をめざして—』三恵社、p.2、2013
- (3) 小国喜弘、前掲「国民史の起源と連続—月の輪古墳発掘運動—」、pp.98-128
- (4) 十菱駿武『『国民的考古学』運動の『復権』と継承のために』『歴史評論』No.266、pp.2-8、1972、9
- (5) 大串潤児「国民的歴史学運動の思想・序説」『歴史評論』No.613、pp.2-15、2001
- (6) 勅使河原彰『日本考古学の歩み』名著出版、pp.211-212、1995
- (7) 中村常定、前掲「月の輪運動と歴史教育」、p.97
- (8) 重歳政雄、中村一哉「古墳『月の輪』への道—新しい郷土観をはぐくむ—」『歴史評論』No.53、p.49、1954.3
- (9) 中村一哉「月の輪古墳の発掘と福本扇状地の研究」『郷土教育月報』No.6、郷土全協事務局発行、pp.5-6、1954.
- (10) 桑原正雄「郷土教育全国連絡協議会の任務と性格について」『歴史地理教育』No.30、p.17、1957.12
- (11) 中村一哉「教師としての反省」美備郷土文化の会・理論社編集部編『月の輪教室』理論社、pp.42-43、1954
- (12) 中村一哉「郷土研究をすすめるために」、同前、p.46
- (13) 磯田一雄「学習指導要領の内容的検討(2)」肥田野直・稲垣忠彦編『教育課程（総論）<戦後日本の教育改革第6巻>』東京大学出版会、p.459、1971
- (14) 中村一哉「事実から真実を」『私たちの考古学』No.2、p.13、1954.9
- (15) 桑原正雄『郷土教育的教育方法』明治図書、p.1、1958
- (16) 中村一哉、前掲(9)、p.6

- (17) 中村一哉「封建社会の農村の実態」『社会科歴史』No.3(12), p.31, 1953.12
- (18) 中村一哉, 前掲 (9), p.6
- (19) 柵原町史編纂委員会編『柵原町史』柵原町, p.732, 1987
- (20) 美備郷土文化の会「月の輪古墳発掘運動のあらましー私たちは何を学んだかー」, 前掲 (8), pp.30-31
- (21) 同前, p.33
- (22) 中村常定「歴史の真実を学ぶために」近藤義郎・中村常定『地域考古学の原点・月の輪古墳』新泉社, p.47, 2008
- (23) 同前, p.67
- (24) 国分一太郎『新しい綴方教室』新評論, pp.30-40, 1957
- (25) 永瀬清子「みんなが学んだー『月の輪』発掘 30 周年に際してー」『考古学研究』No.118, p.16, 1983.10
- (26) 重歳政雄「尊い経験」, 前掲 (11), p.74
- (27) 重歳政雄「月の輪古墳発掘と村の歴史をつくる運動」『地方史研究』No.11, p.27, 1954.2
- (28) 重歳政雄「社会科日本史 研究会記録」『社会科歴史』No.3(5), p.28, 1953.5
- (29) 中村一哉, 前掲 (14), p.13
- (30) 中村一哉「社会科と考古学的方法について」『私たちの考古学』No.4, 1955.3, p.25
- (31) 中村一哉「＜実践報告＞月の輪古墳 発掘の仕事のなかから」『教師の友』No.5(6), p.23, 1954.11
- (32) 小国喜弘, 前掲 (3), p.109
- (33) 板橋孝幸「戦後の郷土教育運動と『地域と教育の会』」, 前掲 (2), p.93

－図 版－

図 1 中村一哉, 前掲 (17), p.30 より引用。

－表－

- 表 1 近藤義郎「発掘の経過」近藤義郎編『月の輪古墳』月輪古墳刊行会, 1960, pp.401-417 及び中村一哉「月の輪教室」前掲 (11), pp.8-71 より教育実践の事実を中心に筆者作成。
- 表 2 中村一哉, 前掲 (9), pp.5-6 及び中村一哉「郷土史研究グループ 実践の素描」『社会科歴史』No.3(6), pp.24-25, 1953, 6 より教育実践の事実を中心に筆者作成。
- 表 3 中村一哉, 前掲 (17), pp.30-32 より教育実践の事実を中心に筆者作成。
- 表 4 美備郷土文化の会『スライド 月の輪古墳』1954 及び「月の輪にのぼって 詩と作文集」及び前掲 (8), p.56 より福本中学校の生徒による生活綴方を引用 (なお, 表中の「／」は, 改行を意味する)。

表 5 重歳政雄, 前掲 (28), pp.28-32 より教育実践の事実を中心に筆者作成。

－謝 辞－

本研究の資料収集に関して, 梅野正信様, 角南勝弘様, 美咲町教育委員会, 月の輪郷土資料館, 岡山県立図書館に多大なるご協力を頂いた。感謝を表したい。